

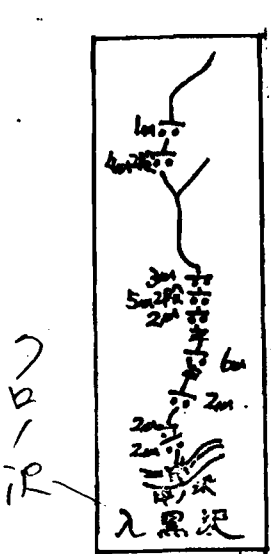
り、倒木が多い。

やがて二俣。右俣は平凡な河原。左俣には、20m二段の滝あり、こちらの方がおもしろそうなので、左俣に行く。左俣はこのあと源頭部までナメが続く。滝は数個ある程度。いずれも簡単に越せた。

源頭部の二俣は、右俣のルンゼ状の急登の草付をだましながら登る。右岸には、キンコウカやオオムラサキが群棲し、美しい。15分程で尾根に出れた。そのあと尾根ぞいにヤブこぎ10分で、三角点のある摺上山山頂。シヤクナゲが群棲していた。

(記)

[タイム] 出合(6:55)→二俣(7:35)→尾根(9:00)→摺上山(9:10)



20 /
入黒沢

1984年7月21日
L

中ノ沢林道から入黒沢出合いめざして下り、出合でワラジをつける。遊行をはじめて15分程で6mトイ状の滝。水量少なく、楽に直登できる。

このあとしばらく小滝が続いたが、左にカーブしたあたりから平凡な沢となった。ゴルジュといえるようなものはないが、兩岸ともヤブが深く、暗い沢であった。

7時45分、二俣。左俣がヤブで隠されているため、右俣に行きそうになる。小さなルンゼ状になっている右俣へ2,3歩踏み出してから戻り、左俣へ入る。水量はかなり少なくなり、兩岸ともヤブ多

く、歩きにくい。

8時10分、水流なくなる。岩の下から湧水のようにになっているのを確認し、40分程ヤブをこいで、尾根に出る。

(記)

[タイム] 入黒沢出合(6:50)→二俣(7:45)→源頭(8:10)→尾根(8:50)

焼枯沢

1984年7月21日
L

赤倉沢に入る西・渡辺パーティと一緒に中津川林道ゲート手前まで行き、車をデポして、あとはひたすら林道を歩き続ける。2時間半かかって、やっと林道から解放される。

焼枯沢の出合は林道からは見えない。そこで、少し先に進んで、中津川がみおろせる所から下に降りて、沢を少し下降して、焼枯沢の出合に着く。

さて、ワラジを水にひたしてはき、若林氏は一服ふかして、9:00いよいよ進行開始。

実はこの焼枯沢、うわさによると「な〜んもない」という評判で、若林氏と私は、「カスにはカスしかまわってこないのネ〜」などと、いじけていたのである。

アプローチばかり長くてカラだった（焼枯沢なんて、名前もあんまり良くない）では、ますます暗くなってしまうので、そこは三十路の迫力コンビ、なんとか二重丸の三段滝あたりを出現させましょと、がんばって出発。

ところが、しょっぱなからクマの足跡と食跡らしきものを発見。この辺はクマやらカモシカやらが豊富だと聞いてはいたものの、さすがにこわくなり、ワアワア叫んだり、歌ったりしていったので、どうやらこの日の対面はまぬがれた。

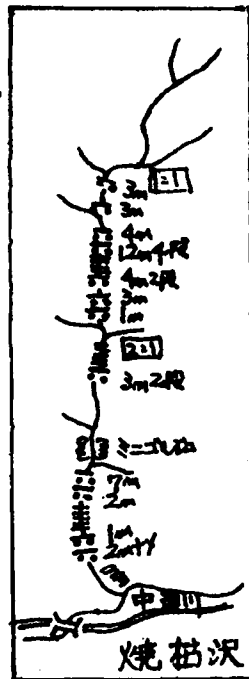
さて、出合から5分位、右手にスラブが続く。しかし、川幅は2mくらいなものだから迫力に欠ける。小滝2つが出てきて、その先は50mくらいのちょっといいナメが続く。

「何だかこの先、ほんとに何も出てこないような感じだねえ」などと話しているうち、2mの小滝を越えた先に7mの階段状滝が出現。水ゴケですべるので、左側の水際を登る。

9:23左岸から支流が合流。その先右岸から支流が合流する所までは、ちょっとしたゴルジュのミニチュア版。そしてその先、小滝をまじえて軽快なナメが50m程続く。大きな滝がないと、その分ちょっとした変化が結構気分を左右する。

さて、今日の二人の気分。若林氏といえば、昨晚テントで蚊の大敵待を受け、あちこちキスマークが目立つ（45ヶ所も刺されたとか）。私も蚊は勿論のこと、テントの中で両脇からイビキと歯ざしりでもてなされたうえ、食当で4時起きだったから、何となくモーローとしている。

ところが、次の4m二段滝を越えて5分程進んだ所で、突然トップの若林氏がすごい声をあげた。「なぬ！クマか？」と思いきや、これがほんとにうれしや、12mの滝が出現したのである。



この滝はちょっと変わった形で、真中辺をちょうど水が横切ってトイ状に流れている。スタンスもホールドも充分。3段に見えるが、登ってみると4段になっている。ともかくも大喜び。思わずにんまりしつつ、一步一步、岩と水ゴケの感触を楽しみながら直登。この辺が本日のハイライトで、この先も小滝の連続。

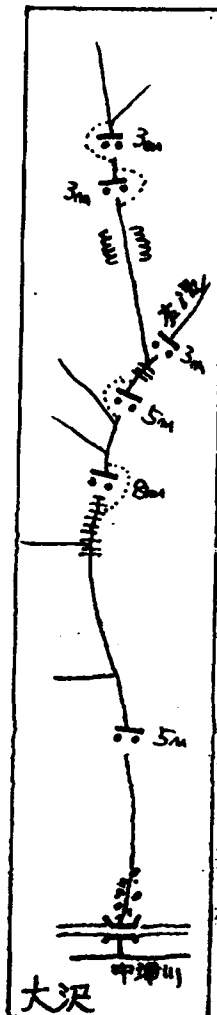
やがて樹木のなだれ込みが多くなり、沢幅も次第にせばまってきて、そろそろツメになる。10:33二俣にさしかかり、小休止の後、地図で地形を確かめて左へルートをとる。すぐまた二俣となり、今度は右へ入る。

ここらあたりで特筆すべき点は、小規模ながら完べきに丸くえぐれた幅も高さも1~2mのおかま状滝である。だいたいは何なく越えられるが、最後の一つがどうしようもなく、木に飛びついたところ折れて、おかまにはまってしまった。再度木をつたって登ったが、この完べきに丸くえぐれた形は、何か名のあるツガなど連想

して、個人的にかなり気に入ってしまった。

さてこのオカマ滝帯を登りきると、水は濡れ、急登となって、森士山東側の小ピークのそばに飛び出した。(記)

[タイム] 焼枯沢出合(9:00)→遊行終了(11:15)



大沢(下降) 1984年10月10日
L1

日陰ゴミ沢をつめた尾根を右側にトラバースすると、木の枝に赤テープが巻いてあった。釣人の目印だろう。そこから急な斜面を北東に向かってかけ降りると、大沢の支流に出た。

コケが生えていて滑りやすい。足元に気を配って下ると、3mの滝が続き、右、左とやぶを捲いて下る。このあとしばらくして本流に出た。

ここから沢は急に明るくなって、河床が白くて美しい。5m、8mの滝があるが、それぞれ直瀑なので、高捲いて下る。

この先ナメとなり、やがて河原状となる。そして林道へ。

林道に出た所で、釣人に声をかけられた。この釣人、以前我会で出版した吾妻の沢の本(吾妻山 その溪谷美をたずねて)をいい資料としているということであった。沢の話しながら車をデポした所まで便乗させてもらう。(記)